重修真書太閤記

四編

五

~13
459
35

459
35

消 福

重修真書太閤記四編巻之拾三

氏家入道卜全討死の事
并信長江北御出馬の事

多藝口の引取難義みゝて柴田修理進勝家鉄炮疵を蒙り一揆原ゝ馬印を奪ひしかども毛受勝助是を取返し漸ゝ引返を処に安藤伊賀守請取て引てゆゝと一揆等をさ間もなく追ひ慕ひあるゝふる伊賀守手勢を引具し取てのへ一揆と四方へ追散し静々と引退処ゝ新手の一揆ども雲霞の如く起て立ゝ追来て安藤ゞ助等福田左内

同政會印

今枝彌八郎一番ふ取てめへ〳〵踏込〳〵戰へば伊賀守も兵士と勵さんため自身鎗を取て突廻り追崩をゝ〳〵群々とむらがりめ〳〵ふ元ふり土地の案内者あり爰ゆ〳〵こゝろ駈出〳〵遮アけるゆゑ伊賀守も持あゆ〳〵凌ぎ難く兵士あまゝ討を我身も手を負ゆら〳〵て虎口を引退き〳〵めば三番ふ備へたる氏家入道ト全ゝ出〳〵一揆ふ討めふ中ふを氏家が組下の種田信濃守宮川但馬守飯沼勘平西尾小六ふど名ふ聞えたふ勇士共鎗先をそろへて打〳〵めふ〳〵とふ新手のゝとあれば一揆を一まゞ追散〳〵めふも早日も暮て折節大雨ふり出しけ

とゞ一揆原ゝ是と幸み〳〵て小道と廻りめけ拔〳〵前後左右ふ喫付攻たりけゝゝ氏家入道ト全此体あてい勿〳〵難義ふるゝゝとあゆひけるふふり古田村の長者屋鋪といふふ処ふ陣取居たる丸毛兵庫頭市橋九郎左衛門尉両人が許へ使者を遣いし此表とゞト全いうゆもして打破をやゝ〳〵されゝ共一揆大勢ふり其村表ふいふりなゞ其方へ渡をゝ〳〵請取ゆふとやけふふふり丸毛市橋心得ゆと返答しけゝゝゞ使者立帰うト全ふめゝと告るト全齒がらとふ〳〵侍が何とて加勢とゞ請やゝ〳〵きゝ傍輩の使をうけ〳〵居ふが〳〵やまつとい云甲斐ふり〳〵腹

立ち出る桑原土佐守飯沼勘平やける猛吾く爰ゑて蹈止て一戰いるゝべく入道殿ゑいたゞや古田村まで退せゑへと勧むれどもト全更ゑ聞入ず飯沼宮川桑原西尾森が輩真先ゑ進こ大勢の一揆をとゝもきび勇氣と奮ふく戰ふゑゝう目ゑあゝる大敵かゞら四方八方へ追ふびけト全そでゑ戸津村ゑ至て味方と尋るゑ丸毛も市橋もいゝろ爰ゑ引取ゝと見つて人蔭もゑゝ是い小稲葉の城ゑあゝし古田甚兵衛と云めの心替ゝて一揆と馴合不意ゑ長者屋鋪へ押寄る故丸毛市橋おゝひも寄ぬとゝあれば一戰ゑも及ず戸津村を落て散々ゑあゝ

ゝゑ其上ゑこの古田甚兵衛その外一揆ども近邊ゑかゝれ居て待ける処へト全入道小勢ゑて走て来ゝゝめど一揆ども前後左右ゑう追取巻手ゑゝげく責けゑゑゑうト全入道も仰天ゝ命を限うと戰ふたゝうされども雨ゑ頻ゑ降來て道いくらゝ案内ゑきゝらば三百餘ての小勢ゑゝ然も勞をとゝう前後の一揆ゑ取こめらゝて道ゝ難く見つけるゑゝそト全入道自鎗を取四方八面ゑ突めぐゝ中ゝと幸馳立ゝども泥濘ゑ道ゑ馬の足をべうあゝまつゝ倒ゝゝめどト全も横さまゑ落たゝうけて心を猛く勇めども老年とゝゝひ先刻ゑうの戰ゑ身心ともに疲ゝ

して起上らんとする処へ一揆大勢ぞどれ合終ふ
其処よりて討とる即等は西堀勘兵衛桒原右近
河村孫兵衛種田助六主の死骸を肩よりけ引退く
と一揆四方より攻めかゝるいづれもあく
に討死せ斯とも知ば飯沼桒原西尾の三人追來
ふ一揆と打破て追まくり氣色たりて引退きける
処へ一揆の大将下間三位鎗を握り直先よ進む飯
沼勘平を血氣盛の若武者あれば少しも屈さず
下間と鎗を合せやゝ〳〵突伏しかども烈しき軍ふ
とび首と取ひまもあらそその上馬よい放とりて難
義ふ見へしと飯沼の叔父鹿島三郎左衛門駈來て

我馬よ勘平を乗て引退くられども一揆猶付慕ひ
けるを桒原土佐守返し合を打くめきだ一揆引
退る桒原馬を引返し落とび一揆よ〳〵ふ退川
返しつ手間取うちよ味方追く馳集り静よ隊伍ふ
備て引けるふ〳〵一揆原今い勿く討難しとおの
ひけふよや駒尾村といふ処ようその別とみあり
て慕くぬぞ氏家が勢ども漸ふ引取てさて全入
道を尋ぬるよあらざりしうば能々尋ねけるふて
や古田村の邊よて討とさせあひぬとたしめよ人
乃告けとび大に驚き力と落をども可為やうもふ
ければ悲歎あゝ〳〵引退きける中ふ弓削修理亮と

いふものの今年十八歳なりけるが、こと聞よう只一騎取てのへ〳〵古田村より至る一揆原が大勢みて毛を〳〵処へ馳のゝう矢ふくに四五人切伏是を氏家入道の郎等より弓削の某といふものあり主の討を〳〵戦場に討死〳〵冥途黄泉の供をすると見ると呼てゝ川〳〵そのまゝ其処にて腹のき切いさぎよく死〳〵たりけるを見て一揆ども哀れと催ふ〳〵追慕ふる及ぶべし此手の寄手心安く引退きけり信長岐阜へ還らせをひ味方の兵士多く討れ〳〵氏家入道い討死〳〵柴田い手を負〳〵と一揆と侮り無謀の軍を〳〵び故あり返もゞも残念ふと木下藤吉

郎召連たらんふいのゝ〳〵ふ不覺い取まゞらめのを宣ひけふよぞ諸将いづれも黙然〳〵て音もせびそのゝち暫時人馬の疲労を休め何ども休息して手負を養ひやべ比ふを〳〵を觸られて出馬の沙汰もなの〳〵此時江北よりい浅井備前守長政味方の諸将の變心を怒て一向宗門の者を語らむ一揆を起さセ鎌の刃の城を責させ〳〵うども木下ゲ為よ打散されて一揆等大勢死亡〳〵ける故是ふ〳〵て再度浅井ゲ下知よ應をび何もゝ已〳〵この在処へ逃帰り蟄を切て居たり〳〵のバ浅井も今さゝ詮方つきふの騒動長政の方すよう出〳〵て信長ふも定めて推

量あり叫らんさゝい程なく信長出馬あるべく不
意ふ乱入せられゝい難義ふらん防戰の用意をせ
でい叶ふまゝと所々の要害ふ兵士を入置けるゝ
まづ國友の砦ふい野村兵庫頭同肥後守を大將と
ゝ宮部の要害ふい善祥坊をとめ置たり
宮部善祥坊継潤い江州醒井の人土肥二郎實平
廿一代の孫父を刑部少輔真舜といふ享禄元年
戊子ふ生る三田村の宮部善兵衛定豊の子とか
ア叡山行榮坊ふて出家し後ふ還俗し元亀二
年い四十歳ゝ
月ゞ瀬の城ふい月ゞ瀬播磨守ゞ子息幼少ゝれべ

ゝてその叔父町野若狭守を後見ふさゝ加へ山本
山の要害ふい今村掃部助阿閉淡路守安養寺三郎
左衛門熊谷忠兵衛今村重兵衛等を籠らゝこゝ賤
ゞ岳の砦ふい吉野左馬助西山丹左衛門尉千田采
女西野二郎左衛門尉と入置雲雀山の要害ふい淺
見大學助八木與市左衛門尉燒尾の城ふい淺見對
馬守ゝて小谷の中の九ふい淺井玄蕃上田林左衛
門大野木土佐守と入置く信長寄來らゞ諸城ふゝ
切て出引包んゞ討捕べゝとのてたゝ越前へも
使者を仕立此趣を通ゞ約束を定めて待たりける
信長此由聞食其儀ゝゝゞ出馬して彼表ふ働さか

んものとして八月十八日五万餘騎の著到あて岐阜を發足あり十九日横山の城に著あひ翌る廿日小谷領へ働くべしと用意ありけるにその日大風雨まして横山の城の堀矢倉ともぐく吹落を信長ご覧ありて四方時節にめくの如き破損あるべくやしけれ敵寄來らば如何をんと宣ひけるに木下藤吉郎もそこにも愁へぶ御心安めふべし三日のうちに元の如くに修復して事かくと更にいとど其間に敵の寄ざる様に計らひやがてとて落らる堀矢倉に目もめけぞ計の人夫とめけて彼是と立さわぐのうちに緩々とまへたれば淺

井方の侍ども横山の城の破損をこそ幸ふれいざ押寄て攻拔んといひけるを長政聞てあてをしうふ世の中に優々とをきに木下が心中さらに油断あるべうぞいのなる計や設け申ん楚忽に押寄あやまちをふたの上信長大勢にて出張せしとうのとして更に手出しもふべうけれぞとてこして三日に修復成就しけり是に秀吉大工人夫を本丸に集め石材木の切合せをふるせたる時に唯一日に建たり今にてめぬとあぐら秀吉の心の機密と快といそめのあそふうけ

佐久間明智等諫言の事
并信長山門と燒拂ふ事

横山の塀矢倉成就しけるに同月廿六日信長惣勢を引率し小谷と山本山の間を取切人數を操入中島といふ所に本陣を居られ余語の庄木の本まての在所〳〵を放火せられしかども淺井の輩兼ての約定ふたごひ信長の大軍に怖れ一人もなられに撰合んとせざる信長心のまゝに濫妨し武威を輝し翌廿七日横山の城へ帰陣ありて廿八日佐和山の城に入御まし〳〵志村小川の城を責落さるべしと丹羽五郎左衛尉柴田修理進両人に仰付らるとその日

の午後より志村の城に攻付息をも續をいとまなくせるゆゑに九月朔日終に落城して志村筑後守討死にされをらて小川の城主小川孫市城を開て降參し同三日信長陣を常樂寺に移され先勢を以て金ケ崎の城を攻さらる是等い一揆の大将分ふりけふゞ責立らまて城を開きおのゝ〳〵ふ落失けを信長こゝに逗留まし〳〵ふるゞ〳〵人馬の息を休め同十一日瀬田へ御越あれば山岡玉林齋迎へ奉りてさはゞ饗應參らをけふに信長の老臣たち小谷へあそ御向ひと奉存しに當所へ御越い何の御術なを上洛まし〳〵はをるまやと心得ぞげに御尋申を

ぞ信長打笑せ給ひ汝等い眼前に武敵のあることを知ぞや帝都鎮護の山あど〳〵自讃して我慢邪見の徒と馳走し勅諚台命とも用ひざる悪逆無道の山法師と今度誅をびい何の時とゝ期とそべき是に坂本へあ〳〵寄延暦寺と焼拂ひ三千の衆を法師等と切盡しあんそのとゝやさをあふよゝ佐久間右衛門尉信盛明智十兵衛光秀大に驚きあいけ〳〵ぞの御諚ぞや抑比叡山い王城の鬼門と守る百王鎮護國家の大道場天子さへ御心に任をぬその雙六の賽山法師と仰らるゝ度々の狼藉とも御宥免ありて穏便の御沙汰あ〳〵と只今俄に亡ぶ〳〵絶んと國家の旧章に違ひ天下の人望に背きあふべ〳〵去年朝倉浅井と奔走して當家に敵對を〳〵と僧徒の所業にあ〳〵とふやあ〳〵元ふゝ樹下石上三衣一鉢の楽門也その罪まる山門諸堂社にあづかるゝあ〳〵然るを焼討にあさんと勿体あ〳〵と種々様々たとへと取理と盡して諫めけれども信長更に聞入あて〳〵去年對陣のころ佐久間稲葉を使として利害を説を公方家の仰に違てび後日に焼拂ふべ〳〵と再三に及てやをゝに衆徒一圓承引の色あ〳〵勅諚台命を忽緒をゝとその罪軽び〳〵剰一念三千の學の窓に断袖の淫欲と恣に

〜瑜伽三密の靈場と陶朱猗頓の貨殖とをもて佛祖の法則と違ひ先德の規戒を誤る天下政道の妨あり今是と亡ぶべきと殆太平の善政と言べ〜し〜又ゐれと宥免あ〜ゞ此以後衆徒い〜ゞ我意とつのゞと國家爭亂の基と開く〜〜先〜帝王の宥免あ〜しゝ佛法興隆の御本意とあ〜ゞ座主の宮ゝ親王あり衆徒ゝ摂籙の公達あり そゝとらの恩愛とゆだねられあふて姑息の御計ひおそ〜まま〜つあ〜朝家日〜に衰へゞども山門あれを愁とせゞ年中乃大儀をゝて行てをあ〜ゞども三塔更に用途と獻ぜいづ〜〜に鎮護の法驗あるいづれか

祈禱の靈応ある〜ゞ山門三塔御建立あるゝ平城大津の宮に御守め〜〜ける頃ゝ朝威とゝ〜八島の外に及び三韓渤海の朝貢も四時に断ぜと聞ゝのゝと無益の堂塔にあゝとの燈油料と費し異國の木像銅像に莫大の粮供をふさぐと何の為あるぞや信長いや〜〜も弓箭と取て断絶の將軍家を再興し奉り禁裏御所と造營し諸公家の困窮と援ひ奉〜に山門却て信長と敵とゝあゝと山門自滅の時至るとゝ云べ〜一と誅〜て百を懲そゝ天下の善政なり今日この山と燒て五畿七道僧徒の眠とさよ〜あゞ石山本願寺門徒も自然と恐怖〜て降參

のいろを顯さべき若又されば見懲をぢいやゞ
て押寄てこれを破却せべ此両処を攻滅さば諸
國は長く一揆の災を止べし早く用意をべしと下
知をられけるよう光秀猶も詞を盡し諫を納も
ども信長一向用ひなくば同十三日未明より總勢
一同はあ寄さしめに廣き天台山四明の峯を中
よりして稲麻竹葦の乱也如くとつ取巻て攻立も
ぞ三千の大衆あのひも寄めてしひ以の外は周
章し谷く峯くの切処くを支えて防ぎ戦へども去
年朝倉浅井のためは年來の貯をば過半用ひ盡し
て頗る不如意の折節といひ敵も短兵急に責せめ

責つめ切廻るよう衆徒防戦の途を失ひたゞ逃
道をのとめて落支度のみあるけもバ信長鐘とか
らし大鼓を打て諸勢をとゝめ彼五十段百段の嶮
しき道もものそ〻しに勇み進て攻戦ひとゝゆく寺く
院々に火を掛けるに折しも大風吹出し山王廿一
社をとゝめ根本中堂鐘楼經藏大塔文珠樓清浄山
門一宇も残らず焚立たりいたゞきうに衆徒放
逸の心よりその家のもあるで武藝をたしなみ我
立杣に願貝偏執の檀縁とのまいしの三國傳
來の靈像經巻聖教法具無慙のわのほに焦され暫
時の炬に立のぶるとたゞろこれを悲歎せざるべ

ら言語道断の次第あり信長い大鳥居より真直に
攻上り心地よげに四方を見まはし下知をられ
ふと見て金剛院の相撲といへる大力無雙の悪僧
と杖谷の善住坊と只二人あたれ運の盡ぬる信長
めふ相撲い弓の上手あり善住坊い鉄炮に妙を得
たり今日ちて射ろう撃か二川の間をば脱をまず
まれと互に相談し如意岳のあふるの峯によちの
ぼり大木のかげにかくれてねらひをまつまりと
も知ず進こみひけあり信長の運やつよかりけん
彼坂道にいりて信長の馬倒れしにより乗替と
まちて鳥居のもとに立あふと相撲と善住坊い矢

をとげ玉をこめて今やとまちうとびて在けるに
信長漸馬にのり直しあるうと拂て攻上り結ひけ
れば嬉しや法敵あり佛賊あり只今撃て鬱憤を散
ぜべしと小躍りして切てたふをばねらひたりと
て信長の馬の太腹にあるう馬い倒れて主い下立
たりされども大勇猛の信長あれば也をば更に
見むもやらぬ石に尻うけ処々の焼
のぶる火の手をあげめて居あふにより相撲坊お
とりあげとりつくき信長のふるまいや一の矢をば
射損ずるとも二の矢に於くい脱をまずといふに
う早く大箭をぬき出しこめて切しがふ

にあらいろよ弓弦きられて箭い前へある谷へ落たアけう善住坊ちれと見て鉄炮よ二川王をとめ強藥よ〜て火ぶくときれば信長の左のひきを磨て玉飛たまども剛勇不敵の信長ちれとも更よ見ぬよ〜にく〜おそ〜浦〜けるよ近習の面々鉄炮の足輕をよびらをて五六百人筒先をそろへ〜件の峯と目當とーてひるを打りうをを〜ゆ彼二人をかられふもぐき蔭もあ〜たゆ〜射あつをび馬を傷アて主よ疵つうびて主と射んとをれい強きれて箭とを ゆぶ天運ゆるを信長うふとゆぶゆを〜ひそうよ峯をぐうて落たりけう

杖谷の善住坊の山徒あ〜ぬと前よ辯ぎう又如意嶽の方位もたぐつふよ似そう此巻ごよ後人の蛇足多〜因〜一本にう是を補ふといつど也猶その實をゆるさぐふ処もあふべ〜來者の是正ゆまつのし

又按よ山門責の時信長勢田の山岡氏の城よあアく是を指揮〜給ひ火鎮アてのち登山あうし と云織田家譜もられよ同じ然らば相摸坊のこと全く誤う明智光秀坂本の城を賜そること元亀二年九月よ〜て山門を滅〜てのちの事〜大鳥居の前よう山上迫道をぐぶる嶮峻今日の馬を以

て謂ひつゝ然れども東南邊鄙の馬ハ山上ゝ馳駈し嶮を下り岨をゆくこと其性ありと聞い怪しむるたゝぐるなり

重修真書太閤記四編卷之十三終

重修真書太閤記四編卷之拾四

信長江州より帰陣の事
并秀吉宮部善祥坊と語らふ事

山門金剛の相撲坊を世ゝ許されたる射手ゝて遠矢い三町ゝ及び弓い一寸二分を強ゝとあるを然るに彼が矢先ゝ誰かを命と全くもぐさ然ども信長を射く中らず却くその強乃さまゝたぐそのの運の然らしむる処とのふべし信長のちゝ相撲坊の矢を取寄らるゝ見るに箭の根一尺二寸ありけるを是ゝどの弓勢たぐ

さのミハ思はれざ身に當りなバなかなか以てたまふべき危ふかりけることなりと仰られ後の證據に取置べしとて近習者に預けたまひけるが秀吉の京都大佛殿建立ありける時件の寶藏へ納められしに也去れバ叡山の院々坊舎ことごとく燒土にて變じ佛像經卷灰燼となり衆徒の壯者ハ討死し老弱ハ四方に落散一山忽ちに滅亡に及ぶこと不思議といふも餘りあり人皇五十代桓武天皇今の平安城と造營ありて末代守護のため傳教大師と御心と合せられ草創ありし靈場なり

天台座主記と按ずるに第一代義真和尚（私ニ修禪大師と云）

の時弘仁十四年二月廿六日敕賜寺額號延曆寺三月敕被定俗別當とあれバ延曆寺と云寺號ハ弘仁十三年六月十四日傳教大師入滅の後二百八十九日過て敕賜ありしなり

代々の帝王も崇敬あさからざりし叡山と武威に募りて信長の滅ぼされしことを傾け難する人も多かりけるに是と古今に超過たる活斷の名將かなと稱美する翁ありその故いかにと問バ佛ハ俗縁を斷て悉く釋氏に入釋氏に貴賤なし入法の遲速ばかり等を立べし然るに山門の座主といつぞ竹園の所職として淺臘なれども三千の貫首に居て

猶親王の俗縁と絶ぜそもそも続いく攝録の公達卿相の子弟院くの任務と私して僧糧ふ冨檀施ふ饒なるまく顯密の學ふ乏しく救護の力ふ名い煩悩を断を以く揚もども心を更ふ菩提を求めばされば朝倉浅井の如き等の頼むに聞く慈悲柔和の衣体ふ降伏殺伐の利剣ととり忍辱愛憐の袈裟に邪見放逸の弓矢携ふること近くい開山の意ふ戻ま遠くい本師釋尊の教ふ違ふ業盡有情の網罟ふかるに等しと語もとで今一人が云様何さまふも信長かうしゼば近江國半分い山門の所領とくて形ばかり菩薩形ふれその所業い第六天の魔王に同じふ

くも打滅しめのうあるといふそのもあり斯て坂本ふ城と築く志賀の郡一圓と城付とふ明智十兵衛光秀ふあるくあるに守らを信長ふ佐和山へ帰陣まして江州の事一朝一夕に埒明ましくもとば一まづ帰城あくて又あを出陣あるべきれとく同月廿一日岐阜へ還御ありそれより後ら浅井家ふ手出しもせば暫くい江州静謐ふなりにくまく木下藤吉郎い横山の城ふありて合戦あれば軍慮をめぐらし静謐なれば智謀を以く敵方の諸士ば帰伏かさしむ就中宮部の城主善祥坊ら武勇ちぐれく浅井一味の諸将の尤心ふくきら

のあれば、まづ是を降参をさしめんと思ひ藤吉郎自身宮部に趣かんと用意あり、けふは郎従等をいろく心を知ぬ敵城へ向ひ、あそんこと然るべくば、御用あらば使を以てさるべしと止めたれども秀吉冷笑て何の危ふきことあるべき敵は味方をあしくも思ひ立しいくさ味方もあしくも同じことあり然ば敵の城ふかく終に味方の城あれば我居城とあとあらば其上敵も敵なるものぞ善祥坊も山門の僧なれば武道を好み兵書は明めしと聞ばあとと説んこと實に安し此故に我身行んとおもふなりとて彼善祥坊浅井普代の臣あらばいさか降参をさしむること難かるべくれども宮部は浅井に頼まれて新たなるその旗下となるべしあれらこれは説く志を飜させんこと實に容易かるべし其方たちいさかの氣遣ふことあらんとて従者五つ六人を召具し即刻宮部に趣き善祥坊に對面は請宮部の城門の兵士何方よりぞと尋ぬるに秀吉あとを横山よういさこの所用ありて使に参るし者也と云ぶ兵士これを善祥坊に告善祥坊聞て物蔭より伺ひ見るに勢早き男の眼ざしもそなはりそなの面猿に似たれどこと大きく木下藤吉郎かふべし何ごとをいうんとて來るにや不審かぐらに

川此方へ通ーゆくべくこころを小門と開かせて但一人御通うあるべくとやけあるべう秀吉一人内ゑ入て卽等ども召べくに門外ゑのこ置こうやうぐ善祥坊出會て横山ゑ織田殿の持城なう然るゑ其城ゑうの使ごあれいまづ敵方の人あり何の所用うあうて御越いやと尋ーめゑ秀吉答てやさく某い横山の木下が卽等ゑてい主ゑてい藤吉郎ゑやゆ狀一通う御聞あうて御返辭を承ーやたー抑秀吉がやゆに何卒御邊と善道ゑ帰をーめゆねての志願成就あうーゑへやゆをとやていといへゑ善祥坊聞ゑ其方の主の秀吉乃やゆ条心得めゑー我その

むゑーー叡山ゑあうて大小乘の經論と學び阿耨多羅三藐三菩提の修行怠らざれゑ凡俗と善道ゑ導くべくと知いちんや我身の上のことに於て何人と頼むべきんや無益のことゑ使節と勞さふーーと近頃ゑのどく千万ゑ存ぜといへゑ秀吉何様御邊い凡俗と善道ゑ導くべくとと知をゑふとやさうゑども御身れ悪道ゑ落るべくとと知せゑくねと見へたー實ゑ燈臺本らーく睫の塵と見ゑくねたとへのふーに漏ゑちぬ御事のゑうゑさゑと打笑へゑ善祥坊いゑーー我身の悪道ゑ落るべくと知ぜとゑそも何事ぞやと云べ秀吉いゑーく御邊ゑーめ山門の行業坊ゑま

しかして天台の止観を學びゐむつをとものるる亂世に逢佛法を以て人を化益をるを其事小なりと天下を静謐をしめ万民の苦厄救ふをい其功大なりとの御心をもつて三衣を脱せられ六具を著し百八煩惱の念珠をもつて三尺の利剣を握ゐひしふあしびや然るに天道に背く人の後舞をゐふとの笑止さに惡道に落ゐふどやせしといへ共善祥坊天道に背く人の後舞とい何事とさしていらるぞと問木下答ふる様淺井長政い都近き江北ふあるなぶら公方家に出仕をば禁裏へ調貢を奉らば王土に住して王位を敬をば武家にして武将を貴

ばられ天道に背く人に非ずやその淺井に從ふて存亡を共にをんとあるしゐふとい後舞にして是ふきや天に背く人に戻る淺井家ゐをば亡びんと日あるまゝ御違それと共に世を果して抑何の益かいなふ台嶺下山の本望とや何の時に成就をんとおもてるるにや濃州の信長い中絶の將軍家を再興ふし荒廢の朝儀を奔走し奇代の良將ふり四海の一統遠ゐしゐ天下静謐近きにあるべしさてあそ年來の御本望も成就をべられと詞理を盡し辯舌ふどまゐば説たりとうで善祥坊心中の諸蘊厄見透されば默然として暫時ものいをば木下ゐ顔色厄

守をつめ居たりけるぶ良あうてやけふい信長の
謀主ふ木下藤吉郎といふものあうその長ひさけ
をどもその智大さくその顔猿ふ似たれども其勇
毛虎の如し然も辯舌さやうう理解明白なるさ
聞て今日その方乃体と見ふ必その藤吉郎ふる
べし包まをあふふまる某が胸中をでふ御推察の
通をあれ毛別ふいふに及ばぢ是ふう織田家ふ隨
從して犬馬の勞を致をべし某めと法師ふくつま
ども心ゑ武士ふおとるべしおのをべ口外をし
一言更ふ變べき理なし岐阜表の首尾ふろ〳〵頼
奉るふう去なば〳〵今年ハめをや余日もふ〳〵明春

ふいをうて浅井と手切しつふふる〳〵ふ浅井家の
めれと一合戰してその〳〵ち御味方に參るべし此
事いさ〳〵か以く相違ふしと誓言を立て心底を明
しられを秀吉大ふ悦び御邉の御志い金石ふうも
重く堅し天下の大幸此上あるべうべ信長も左こ
そ満足ふ存べし但御邉いふ〳〵其心ふ相違ふ〳〵毛
内々同志の輩を語らひあく高島の郡伊黒の實泉
院い某ものく知ふ〳〵あうてや通し置し訳あれを
御邉ふうも誘引あうて帰伏ふさ〳〵めふつとやけ
をを善祥坊笑く我元ふう伊黒を同伴をんとおも
ひし処ふのう急度帰伏さをやべし但明春までい隠

密たるべしと盟約して秀吉は横山へ帰りけり

淺井勢横山城攻敗北の事
并宮部善祥坊織田家へ屬する事

其年も既に暮て元亀も三年の春よりけるみよりて織田彈正忠信長岐阜の城へ越年あれ共歳且の拜賀のたもかいに信長の子息三人とも元服あり嫡子奇妙御曹子十六歳神九郎信忠と名乗をあらへ給へ

信忠は弘治三年丁巳の誕生母は尾州住人生駒氏乃女
次男茶筅御曹子は勢州の國司あり北畠信雄と称せられる
信雄は永禄元年戊午の生今年十五歳母は信忠と同し
三男は三七郎同國神戸の城主あり今年十五歳信孝と名乗る

信孝は永禄元年戊午の誕生母は坂氏産所は熱田乃岡本太郎左衛門の家なり信雄より廿日以前に生まつしかども母卑くれば信雄の誕生を待て披露をし故弟とする

三人とも岐阜の城に於て同日に祝義を行なれし
かば一族家人出仕して獻上いやしく及ぶ遠國在番の者迫も或は参上或は名代を以て賀儀をやけ

あるよう江州横山の木下藤吉郎も年頭の禮旦を若君達元服の悦びと述んためよ参上し宮部善祥坊の事その外淺井家進退のことを言上なり江州の事をべく藤吉郎次弟たるべしと仰出されかの横山い大事の処あり長く逗留い然ふべくぶと早くく御暇を仰出されたり此時江州淺井方よくい木下藤吉郎岐阜へ相越く留守のうちよ横山の城を攻ぬくべし猿たるなるべく何ぞの事うあらんと淺井七郎赤尾新兵衛二人を大将となし三千餘騎ふて押寄たり横山の留守い竹中半兵衛重治なりかり八百餘騎ふて留守をし処なり淺井の

勢急大勢なり横山と七重八重よ取かこうて短兵急に攻付しかい重治防戰の術を盡し戰ふといへも敵ら大勢なり終よ惣構を攻破られ二の丸まで也攻入事なるよりなり竹中八百餘騎と一所よあらめ詰の丸へ引籠り爰と專途と防ぎけふよ寄手の中なり野一色助七と名乗て真先よ進し城兵と突立突立勇氣をげしく働るけるを見く木下ゞ郎等よ加藤作内鎗と取く助七と渡り合暫くいどて戰ひけるゞ助七が持たる鎗の柄何とけん半おろよてをつきと折けるゆそ作内得たりと鎗とりのべ突込むらきなり早業の助七りとかいらくて刎倒

し刀と拔て作内ゞ膝口へ切付たり作内尾居ふさ
ふと倒れ實ゝ危ふく見へける処へ城兵苗木佐助
たゞ来り野一色ゝ向ふ野一色加藤とをして苗木
に向ひ雙方太刀を合て戰ひ〳〵勝負つかぬ太
刀投捨引組ふ〳〵捻合けれども助七組かちて終
に佐助と打取たり其ひまゝ竹中い寄手と左右へ
まろび落し早くも本城へ入木戸をさし固めて鉄
炮を打出し防ぎけるゆゑ寄手たゞちに入ふとも
かなはざる
野一色助七後ゝ中村式部少輔ゝ仕へ頼母と云
されども寄手い大勢なれば入替〳〵無二無三ゝ息

とも續きて責立ふ竹中たゞちゝ八百餘騎三千ゝ
おゝよぶ大敵と引請ても屈せず防ぎけるゝ浅
井長政寄手惣構と乘取〳〵こゝ然い新手をさし
向ゝやと下知〳〵又三千餘人と加へたり寄手
いゝ〳〵力を得火水ゝふるうて責立ども竹中半兵衛
心を矢猛ゝおのへとを味方い小勢ゝて入替るべ
き援もふ〳〵夜昼の軍ゝ士卒つかれ日頃調練の兵
なゝ〳〵今いたゞも氣挫け意ゝたゝまとゝ危ふく見
たり者と然るゝ木下藤吉郎岐阜ゝり帰り足鞭以
鐙ゝ合せて急ぎけふ途ゝて横山合戰の次第を聞
そへ一大事と真先ゝ進めばおとらぬ郎等三百餘

人例の五色の吹貫を立て龍の雲に乗り虎の風に従ふ勢ひとめ〳〵押寄るなぞ従兵いかにも勇とあり玉あられの鉄炮と山谷ゆひゞかせ鯨波の聲と揚げ〳〵を来るを浅井の兵士もそれ例の五色乃吹貫よ猿めが引返せやそれ角てい叫ふべうゝ備ぶ立ふとて〳〵猿めがいふくやといふ程あそあれ加藤虎之助福島市松片桐助作堀尾茂助蜂須賀父子駈出し〳〵當るを幸切ふせ突ふを働きけるあぞ浅井が後陣の五千餘騎たちまちに切られ〳〵東西に散亂を城中ふてもこの体と見れば然べ打出駈ら〳〵をといふあうちゆく八百餘騎城戸ば開い

てとられおいとらじと喚き叫んで切〳〵出ふ寄手多しといへども前後乃敵ふ切立られ四度路よりて敗走ば浅井七郎赤尾新兵衛の〳〵と見て木下帰りうゝい事むづう〳〵早く諸勢を引上んとあをれども前ゆへ竹中猛希の勢とるゝて打の〳〵後ふを秀吉飛龍の怒と川の上て浅井勢這く逃〳〵見苦しくを小谷とさ〳〵て引返を竹中勢いひとへう死〳〵たふ人の蘇生を〳〵如くさ〳〵めき連て城ふ入ぬ木下竹中の防戦を感賞しその外士卒の働ば襃美し惣構二の丸を修復し堅固ふ籠城あ〳〵ろうべ浅井よりもその後いさらふ寄んともをば攻〳〵い無事

ふ屬しけり爰ふ宮部の善祥坊い旧冬ふう木下と約束をしてとふもばそも淺井と手切して織田方へ同意せどゆとおりひたち手勢三百餘騎を率し宮部の城と出ぐ國友の砦へ押寄せめかくる此砦ふ乗野村兵庫頭居ぐうけるが善祥坊が乱防ていかを是もおあじく三百餘騎らいく出姉川と越いふされい宮部勢と戰ふたりぐふふ野村兵庫頭敵ぶおふどりてに善祥坊い山僧ふう武士の道へうやかるべし只一めぐに攻らいし宮部の城と乗取しと備ふそらふ切かくふ宮部い法師落ふぐら内と喰ぐび妻と具をび兵法のこに心ぶ盡をしてとふ

もび野村ぐ推量とぐかう勢の配う隊伍の備尋常ふして百騎と引ぐけ敵とおびき百餘騎とうけ便宜の処ふ伏てかう置宮部まつ野村と戰ひいいりぐう逃ぐ引けるを野村まて追ひ短兵急ふおひかくふ漸宮部ぐ勢ふ追付どかかて謀とふれば宮部大返しふ取てくに野村勢大ふ肝とけし蹈とぐまう必死とふて戰へばかの伏勢左右ふう切かくうけるふう野村いふく周章し足ふく乱ぐて見へけるうそ善祥坊立あうぐうそや敵い浮足ふうぐそふくかめゆそ共と勢猛くふるまふふう野村ぐそふあうく見つけう

野村が組の藤岡藤五郎道の傍よりこゝに止まり藪をよ
なぞふ鉄炮を以ておちこ居けるふ心も付ず宮部真先
よりもこゝんで追来るもそれ善祥坊おさんあれと火
ぶくるを切ぬあやまるべ善祥坊が高股ふ當て宮部
をあらこゝに倒しをふをべ善祥坊が郎等ふ友田左近右
衛門ちーを寄宮部を肩ふ引うけ藤五郎と突倒し首
と取いさまなのけをべそのまゝに引ひつゝ藤五郎
らさまでの痛手ふもあらざれば起上り大将宮部
善祥坊を打落したるを引返し追打とるをと呼
たるにより野村勢むらゝと引返を友田ゝと
難義ふ及ふ處へ水下が郎等の加藤虎之助三百餘

騎ゝてをを來を横鎗を入けるをぞ野村が兵士散
散ふ切らるれ姉川をとをうて引返をべ虎之助
下知して逃るをさの追をあらを宮部を救ふた
めふ打しられなう軍ハ今日ふ勝るをと大
音聲ふよばををけふをふ友田ハ無事ふ主人を
たをけゝ宮部の城へ引うへ加藤が救ふうを
をゝとゝ危ふゆうけふ次弟のふと厚く虎之助を
をてなーを是ふ織田方へ帰伏して木下どのゝ諸
共ふ忠切ををげむべくれを事のふをくらゝ
披露あられをと加藤ふ傳言あーたうけを
清正神儀の譜ふ就ゝ考ふをべ今年ちづゆふ十

二歳なり木下藤吉郎三十七歳竹中半兵衛廿九
歳淺井長政廿八歳

重修真書太閤記四編卷之拾四

重修真書太閤記四編卷之拾五

淺井長政伊黒の城を責る事
并日根野兄弟智勇の事

宮部善祥坊を織田家へ帰伏し淺井家へ敵對の色
顕さんとて國友村の砦へ押寄野村兵庫頭と戰
ひ切勝といへども國友勢の中より藤岡藤五郎と
いふものゝ放ちし鉄炮に當て善祥坊手を負しゝ
ば從兵散乱し宮部煩ふ難儀に及びそぞろに危ふく
見へたりけるに木下藤吉郎の心入よて加藤虎之
助をゝひ來て國友の横合より切かゝりける故善

祥坊危急とのがれ事故あく居城へ引とり虎之助
よ對面し木下の懇情を謝し我今日既よ討死をべ
あらとけるよ御加勢よ因て十死とのがれ一生を得
たるのこあらば兵士とも損ぜず剌敵を追崩した
る御芳志忘るゝ存ぜとて厚くもてなし扨今
日より織田方の旗の手よ從ふ宮部ふり隨分同志
と語らふて追付參上仕べしとて加藤を帰し我身
手を負つる虚を伺ふて追付敵寄來るべし其用意
とふせよと即從共を勵して防禦の備を嚴重ふし友
田左近右衛門と厚く賞し善祥坊手疵平愈よ
で領地の仕置万端左近右衛門よ任とり去共淺

井勢寄來ともふりとくれば善祥坊心ふかく療治
して疵い全く愈よけふ然るよ去年木下と約束せ
し高島郡伊黒の寶泉坊のとい山門の衆徒ふて淺
井家縁者ふりけるゆ善祥坊とい入魂なりしかい
宮部ふり書翰を送りて織田家隨從のことを勧め
に寶泉坊も去年よりう木下と内々申通ぜしともあ
りしよ今又入魂の善祥坊の勧めよりいふく
織田殿とふるとくしかりひけとば忽よ志を變じ
公方家の御味方よ參り淺井家へ敵對の色を顯く
しるるにふり淺井長政大よ怒り此坊主その儘よ
さし置てい高島郡一圓よ敵とふるべし早く押寄

誅罰もべ〳〵として同年四月十三日長政三千餘人を率ゐ高島郡へ出張し伊黒の城を取ること一時攻に乗破らんと無二無三に責立る城中小勢なれども兼て期したることなれば少しも驚く氣色もなく寶泉坊が家老堀江傳左衛門武邉功者の勇士なるべ大手の櫓より上り勢猛く防ぎけるに淺井勢勿々たやもすれば攻入べくも見へざりけり

大溝より河原市の間に加茂川あり其の川上に伊黒の城跡あり

長政あるじに兵士を勵まし自親真先に進みて下知しけるに三千餘人いつもなき一川にて切

ども射ごゑも事ともせぬ短兵急にとり立ゐたて攻くれども城中の武士いづれも今日を限りと矢石を飛し大木を投出し一息をも續を働きけるあるを寄手ども〳〵責あぐみ手負を助けくさつと引爰に濃州齋藤家の浪人に日根野備中守弘成同彌次衛門尉弘繼兄弟い齋藤没落の砌右京大夫龍興と共に濃州を立退くるがあの程い龍興の手とるかれ江州に來り淺井家を便りて音信けるに長政大に悦び兄弟共に名高き侍なり我為に助を得ると厚くもてなし客分とさし置けるが今度長政伊黒の城を攻ると聞在陣の見廻かたく參向し

日頃扶助の恩より報じゆべきため一働き仕らぎや
と存て罷越ゆとヤけども長政頻より感賞し日根野
兄弟と呼近付この城の兵士等らく防戰して更よ
りそる色もあしこと攻るよりわしき術やあふ
と尋ねい備中守舊冬この邊を巡覽しゆふさ
のし要害のよきヤ處よもあらば殊更小勢にて
所詮久鋪保りとあたらしく然るよ城兵あそらい
ろなく粉骨を盡して防ぎ戰ふい後詰の兵をまつ
のなるべし今迫味方よて敵の色を顯ちと互
に相救ちんとの約束をし
卒末々迫少も屈さば支へ防ぎいと全く後巻の約

を頼むよ相違ふしこ因てその後巻の勢の到着せざ
ふうちにちやく責落しあふべきことをてゆとヤけ
るよりう長政いうふも後巻あるべしこと某もおも
ひ付たれば士卒の損亡ともかへりて短兵急よ
責しふりされども城中の防ぎかちげしくたや
すく責入がさしいうぐちべきとヤあれば備中守
當城の強きい後詰の味方とまつとおのもれゆか
たもと後詰の味方ふらんと推量るよあの邊まて
い高島の礒野よ相違あるべうばそれとばかり
ううせさきるべくと咽ちけどい長政大よ感心し然
ば早く計ふべしとて三千餘人と二川より引るけ一

千餘人とゞ日根野兄弟よりさづけ二千餘人い長政の手より付て城と責さきのなきたる侍一人寶泉坊の使と偽り高島の城へ遣らし長政當城と責いとゝふもちゞ急あり早く救の勢を出されゆべし左ゆくゞ長政沙前後よりうさし來して打捕やべしと言とけとゞ礒野丹波守あとに寶泉坊の使ぞとおもひ長政い我母と殺をし仇あるとゞ恨骨髓より徹を殊より近き伊黒やで寄來うしとゝ天の與ふる処なり速より後詰して淺井を切崩しやべしと返答し即時より用意し五百餘騎雲の峯と出鳥の林よりけるゞ曳々聲と出して打て出礒野元より淺井の

軍ぶりとい知たり大勢ありともなどう恐るゝん只一攻より責めゆ長政を撃て憤を散らんものをと勇み進も理なり淺井い礒野の返辭を聞日根野よりかくと告しゆゞ日根野兄弟仕濟したりと小をどりして悦び長政と示し合を礒野ゞ寄來る道の左右に埋伏し今やくと待うけたりゆる処へ丹波守五百餘騎と引卒し伊黒の城と救らんとて來り長政の陣のうしろより面もふらゞ切てゆる長政ゆてより礒野ゞ來らんとを謀を三千餘人と二川より引とけ千餘人い城と攻千餘人い礒野に向ひ日頃月頃あるとなゞこし中あれゞ互よあろよ恥

かゝる一足も引ふ引じと勇めあひ赤尾美濃守同
新兵衛礒野ろ〻向て切うゝれば礒野五百餘騎よ
さと笑ふて鎗を合を今日晴とぞ突合ける折し
も日根野兄弟が一千餘人二手よりけて礒野が後
と切崩さんと起りたの礒野間ふる勇士あれども
三方よ敵とうけしゝげ切立らゝ獅子の子の勢
とふ〻て戰へ共切勝べくも見へざりしめゞ力ふく
一方を打破り高島さして引退く日根野兄弟跡と
慕ふて追討し能わごる兵をとめて引返を長政
大よ勢を得この競よ城をも責落さんと鉄炮を打
せ鯨波をつゝり責ゝもぞゝして城中礒野の

敗軍よ力を落しをゝ弱アて見へけるべ日根野
兄弟真先よ堀を飛越乘入たり城中よりて堀江傳
左衛門士卒を下知して二の丸よ支え日根野兄弟
を取巻られ打捕んとひしめく処へ赤尾美作守父
子十四五人よりてられを同〻乘入く二の丸の門
の前よりて手痛く戰ふ赤尾新七血氣よりやり深入
して大勢よ取込らるゝを危ふく見えたりけり
日根野彌二右衛門が嫡子弥太郎生年十八歳父よ
あとゝぬ強勇の若めのなれば只一人懸廻を新七
が危ふきを見るゝ即時よりあけ付取巻たる兵士
弓手馬手よ切ちらし難ふく圍を切ぬけ新七をば

助けたれどもその身い多くの敵と打合く終よと
ゐるて討もらう弥次右衛門我子討もと見るよ
う大よ驚き歎きい〳〵奮怒の勢を顯く〳〵前後左右
の差別もゐ〳〵群めゐる敵のその中へ打て入見ゐか
ど乃者そべて我子の仇ゐう討て怨を復さんと大
音よ詞〳〵戦ふとあそれとおめそぬ人もな〳〵備中
守い弟を助け〳〵駈入〳〵戦つゞ城兵忽よ切まけく
誥の丸へど逃入けゐ日根野兄弟付入んと本丸の
坂口まで責つめく落花微塵と走ゑ廻をゞゐをを
支ふるのをゐ〳〵堀江傳左衛門ゐゐう合て三十
餘合よ及びけるれ堀江い今朝よう戦ひつゐれ彌

次右衛門ゐいうつく切込太刀を請損じ倒るゐ処
を續さまよ切ふをて堀江ゐ首を取たゐけう堀江
うゐをそその陣破をしゐゐゐば寶泉坊今い是迄ゐう
と思ひ搦手よう抜出て何國ともなく落失たゐ大
将をでよ落しのち殘兵いづれを戦ふよ及ばゞ或
ゐ討もあゐひい落しゐゐどよ長政快げよ入城しこ
の程度々敗軍の色を直し日根野兄弟ゐ智勇を感
賞してやまざゐけう

秀吉竹中と密談の事

并竹中日根野兄弟を激を事

伊黒の寶泉坊木下宮部よ勧めらを織田家よ帰伏

し淺井に對し敵の色を立てめば長政ちゝ寄急に是を責るとても城強くして容易く落ひ然るに日根野兄弟ゞ計策ふようて高島の礒野と欺きられ沈打破て終に伊黒を攻落し寶泉坊へ落失て行衛知ずと聞へそれば横山の木下藤吉郎大に驚き急ぎ使者を仕立て高島へ遣ち軍の次弟を尋しに丹波守日根野兄弟の伏兵に後を遮ぎらきゆ川その働の猛烈きれようあのひの外に敗軍をしのち伊黒の城も落ちうけるる始末ちゝ返答ふや越けふを以て秀吉大息續て歎息し日根野兄弟へまと仁名譽の侍あうきれ等ゞ眞實心を盡し淺井を輔佐ち味方のために然るべうぼさそへ江州一統のゝと手間取べいうもして彼兄弟を味方に成ふ殺ゞ如ゝと思慮し竹中重治と招き評定しけるを日根野兄弟淺井家に浪人分ふて寄食を既に伊黒合戰にも彼等二人に働きて礒野を追崩し寶泉坊を攻破ゝと聞此まうけ長政を助けるべ味方のうきめに大なる災といふべいうもして彼等を此方へ帰伏ふさしめんとおもふあう然をとても我彼兄弟に知由なゝ彼等まゝ信義厚きものなれば一通りのことをそい承伏そまゝうあう御邊に元美濃國人にう彼兄弟とも親し

かるべく容ふ彼等ゞ宿所よりとう利害と解て見るべしや御邉の勧よりて彼兄弟味方よ参らば大忠大功なるべしいうゞ計らふて見あそばるといれ〳〵半兵衛ゞ様何さまかの兄弟い古ゝれ等ゞ手よ就て引廻をゝことあるうまとゞも齋藤家没落の節彼等い龍真よ従ふて出國しそのゝち浪人して所々徘徊そゝい聞川るゞたゝうよその在所をゞ知ざるうき然ゞ近きわゞ小谷へ来ゝうと覺ゝうう尤彼兄弟の心中よ重治ゞ齋藤家をゝゝ御邉の墨股よりうゝゝことを快とおゝゝゝけまゞ某ゞ説ことを聞入ざるやいるゝゝ覺束ふけまゞ何とう

ゝて彼等ゞ心を動ゝうゝて見ゆべゝと答けもあよ
ゞ秀吉ゞゝも左もあるべし但彼兄弟御邉いう
様よ説ゝふゝも一應よてい帰伏をゝゞその間よ
合戦あゝゞ彼兄弟定ゆゝ淺井を助けゝ働らくふ
らん御邉よゝゝ彼等よ説てたゝゞ軍ありゝゝ彼
兄弟出陣をざる様よ説ゝへやゝゝゞ重治心得
て成程彼等もざるゞゝよていへゞ急ゝよ帰伏仕
ふゞゞその上軍ありゝゝゝ秀吉も又大ゝ悦び
畧大形心得てゝゝゝゝ戰場よて甲首の百二百よも
隨分ゝゝらきゝへ
勝ゝる大功あるべゝと称美ゝけれゞ重治莞尓と

打笑ひそのまゝ座を立只一人蓑笠を肩よゝけい
かゝみも寥々しき様なれて小谷を至りひそうを日根
野が宿所をたづゝ夜あけて尋行案内しけ
る備中守兄弟折節在宿して驚きるゝ呼入一別
以来の武代おそう備中守いかにも不審げなる顔
色なて竹中殿より木下藤吉郎を招うれあひ墨股
に移らるゝうのち信長あゝ用ひあふようの
一方の軍師として今ハ富饒ふおそれよ傳聞て
そゞろふなそふの見参あそよりも不思議なおゝえ
いふれといつゞ重治聞て打笑ひ何様おのそるゝ
を理あれどもそをい重治が心中を知をあそぬ故

あていふれい重治一且齋藤と中違ふて栗原山のふもとに
閑居をゝと木下藤吉郎度〻來う様々ゝ言葉を尽く
し理を盡しゝて誘引そるよう墨股へうつうそれよう
清洲へあのもさ信長なのも見參ゝ軍の談義をも彼
是と聞ゝ此方なう心付しゝそもそくるゝそばされども
木下なうを信長なうを一紙半銭の合力を請ゝとかし
されば故國旗頭の敵の家なあを共心い栗原の閑室にあと同
じ朝暮の一餐もをゝで重治が私の賄なて木下が飯あび秋冬の
短褐も重治が力なて木下なうけゝのゝふゝれバさそ
此体なていふれそをを不審とあぶそゝ日根野殿ない
齋藤なうトの人の合力を受ふふ心中なや重治軍義ふ

あつかれども稲葉山合戦に斎藤一族の必死とたゝかひ越前の軍に龍興の為あしかりしかどかゝりしとハ重治が誠に斎藤を疎まぬ意まそいぞよされバ斎藤のこふあづかりぬ軍の談議に口入せしことハ露ばかりもなかりしと云べし日根野兄弟ハなかりしハものゝいちばやくありて國家乱て忠臣あると誠なるかな竹中殿さりしも斎藤と中あしからしものゝ左かどまでに心を砕かれて旗頭の家をおもんばかることかはりてさらにさる御心にハ存ぜず我等が心に引からべべし信長に従ひなして富饒栄花の身の上となりなバいかならんと推量しけるものがたりしさに竹中殿に對面して我等が今日の身の上を語るもまことにおもてぶせなれどもい

たね心の底をも見らればこそかく美濃を立のきしのち龍興ぬしハ例の本性なれバ若敷時ハ人を頼きてたらし安き時ハこれかく惰弱のうまれつき越前の朝倉をよくも心の合ひたるとよ我等がかくようく云ことをもくれほどさなりしとおもひハさ義景と内々たよりておめそもしかしぬことのあるしかなまな因我等兄弟斎藤の許を引さりしとこの頃ようく引かうり長政の馳走によりて朝暮の支料より春蒐の衣更まで浅井の恩をうけしとのかちおもしさ竹中殿の心中に對しくまことに消いるばかりなるぞ入てはなかれし涙とゞめなさくござく重治川くぐされと聞君子の過ハ日月の食のごとしとかそやみへたまちる過のなかるべきされと改むるを貴しと

以日根野殿やうとて齋藤の忠臣とうてその先途と見届ゐふ
べく〳〵今日よりうて越前へ引返し龍真王の影身ふそふ
て守らをあへうそれを今更ふおもてをあび爰ふあうて
を齋藤のためと忘ぢとあてび朝暮越前の方とうち詠め
ておくをうさそこて誠ふ齋藤家の忠臣とゆべられ齋藤
たとひ貴邊兄弟と疎とも貴邊兄弟の心ふ齋藤と忘を
ゐふとのはとゐさふ道三入道義龍の幽魂何とうおのゐら
めそれとゐ露わどもおひひうとぬうとひうめられて日根
野兄弟忙然たう竹中やゐて立上う詫もゐを長のゐざう
に大事のうとうとれたう今日それゐ御邊兄弟と尋
ねて來うて〳〵只今もやをうて墨股ふうとのうをちと

を木下ゐ恩をうけゐ年來の親しを所領の長ゐ貢ふうてふの年
月ををうたゐれ然うふとうのまゐ所當ののを送うふ
さぬふうをべて事やく〳〵と多くはあをを御邊の許ふて鵞
眼百疋やむをゐやと存じて參ひゐうをれどうのうと木
下ふやさんふ何の子細もゐうをとゐゐ例の重治ゐ心ふて木下
うのをと塵ゐうもうけぬうをそふへばたれふうとおりひ
めゐ〳〵ふ貴邊兄弟ハ同國のうをとゐうと存付てを
ゐく參うてゐふうといへゐ備中守うをゐき竹中殿の
心の中ふにも頼りくおりひまうをふへば何ゐるうをも
いふむべきをうハまりてそれゐうのを何かい心おうせゐ
ふゐき猶御用めべや承をうんとて燧袋の口ひうき烏

目百足取出し竹中にかゝあるべしとて重治これをふところへ入れて
やがてこれとうるさくいべしと式代しかく立帰る日根野兄弟
顔見合せげらも竹中い奇代の侍あり齋藤と中たがへてもよ
ことの道とびふくたぐへとこの心の中ふおきてことのもぐしさ
いうるあれいべしとて兄弟本國とび齋藤と共よ立のさぶぐ
其主の先途と見てもとぬ心うぐうさと日と同ぐくしていふべくこと
とういと歎息して長政ぐ為よしあき軍議をとうとうと誠よ後悔し
ぐ見てふくう是竹中ぐ方寸よく日根野兄弟の心とうぐうちぐめ
て淺井とうとまのもけるる辯者の舌とおそろしけと
竹中日根野兄弟と說と流布本あるまう多し因てこれと改作と

重修真書太閤記四編 巻之拾五